



石田 東生（筑波大学大学院システム情報工学研究科教授）
 今中 麻貴（フリーアナウンサー）
 大西 雅之（鶴雅グループ代表取締役社長）
 小林 好宏（北海道武蔵女子短期大学学長）
 品川 守（司会・北海道局長）

多様な自然が北海道の魅力

品川 お忙しいところご出席いただきありがとうございます。司会を務めさせていただきます。北海道局長の品川です。今日は、北海道と関係の深い4人の方にお集まりをいただき、これからの北海道についていろいろお話を伺いできればと思っています。よろしくお願いたします。はじめに皆様と北海道との関わり、あるいは北海道の魅力について、「自身のご紹介なども兼ねましてお話しいただきたいと思っております。」

石田 皆さんは北海道と非常に深い関わりがある方ばかりですが、実は私は大阪生まれです。もう40年近く前になりますが、高校の修学旅行が北海道でした。その北海道への憧れが自分の人生を変えてしまったのだろつと思つています。

専門は交通計画とか交通政策とか地域づくりで、北海道のいろいろなプロジェクトに参画させていただいています。地域の人たちと一緒にやらせていただいたのが「シーニックバイウェイ」です。これは、私なりに解釈すると「みんなでつくる美しいまちと道」を指すものです。

北海道の美しさは、遠くから見ると美しいですが、近くへ行くと看板があつたりゴミがあつたりして必ずしもよくない。道あるいは道から見える景色を美しくするためには、地域の人に主役になつてもらわないといけない。自分たちが誇りに思つている、愛しておられる地域のいいものを再発見なり発掘していただき、訪れる方に楽しんでもらつて。それによつて訪れる方に満足いただければリーダーにも繋がる。その積み重ねが地域の経済的な発展にもつながっていくだろう、といつことを目指してスタートしたプロジェクトです。おかげさまで評判がよくて、今、国土交通省道路局で全国展開が始まるろつとしています。

今中 私は20代の前半から「ズームイン!!朝」という日本テレビ系列の番組で9年ほど北海道のキャスターを務めていまして、道内各地を回つていました。結婚で10年ほど前から東京に住んでいるのですが、今は「ズームイン!!SUPER」などの東京のキャスターをしています。

今、東京でキャスターをしていて北海道と全然違ふなと思つことは、東京は流行の発信地でもありますので、毎日のように新しいものが生まれて、それを伝える



筑波大学大学院システム情報工学研究科教授
 いしだ 東生
 石田 東生

1974年東京大学工学部土木工学科卒業。1984年フィリピン大学客員教授、1989年筑波大学社会工学系助教授、1996年同教授を経て、2004年より現職。国土審議会北海道開発分科会基本政策部会委員などを務める。

るといふことが非常に多い。それはほとんどが人間がつくりだしたもので、人が手を加えたものを紹介するといふことが多いのですが、北海道にいたときは私は何もしなくていい。そこにあるものが素晴らしい、大自然はそこにあるだけですばらしいのだから、それを正しく伝えていこう、そついう仕事の仕方でした。今、離れてみて北海道の魅力はそこなのだと思つています。

大西 私は釧路市で生まれて、小学校の6年から高校時代までは札幌で、大学時代から8年間は東京に来ておりました。東京にいた8年間は違つて北海道を見られてとてもいい経験になつたと思つています。

地元ですつと居続けますと、北海道のよさが当たり前になつてしまつて、都会の方が驚くモノにすつと違和感を感じてしまつのですが、一度外から見ることでよかつたと思つています。3年前になるでしょうか、「観光力リスマ」に任命いただき、各地でいろいろな話をさせていただく機会が増えております。

北海道の魅力については、観光面では、今中さんがおつしやつたように自然の美しさといつのが第一に出てきます。政策研究大学院大学の森地先生が、「アジアの宝・北海道」といふことをおつしやつられ、とても勇気づけられているのです。

世界にはスケールの大きな自然があります。例えばカナディアンロッキーなどを訪れますと、北海道つてこんなになつたばけなの？「みたいな思いがしますが、3日も滞在していると飽きてくる。スケールは大きいのですが大味



といつか…。その点、北海道の魅力は、凝縮された多様な自然だと思えます。

小林 北海道生まれの北海道育ちで、学校もずっと地元で、生まれて初めて津軽海峡を渡ったのが、高校2年生の修学旅行でした。

石田 私と逆ですね(笑)。
小林 それで初めて津軽海峡を渡ったわけです。車窓から葎葎きとか茅葎きの屋根、白壁に瓦屋根を眺めて「ああ、日本に来た」と思ったわけです(笑)。「これが本当の日本なんだ」という印象を持ちました。

どうしてそういう感覚になるかという、子どもの頃からの情報として、お正月には羽根つき、凧揚げ」というのが必ず本には出てきますが、北海道の厳しい寒さの中でお正月に羽根つきとか凧揚げなんかやるわけはない。また、私が学校に入ったころは全国一律の国定教科書です。音楽の教科書には、4月と書いて春で、春の小川がさらさら流れて、5月になると遠足に行つて、11月にな

ると白菊だとか、2月の末には梅の花が咲くことになっている。つまり、本州の気候に合わせた記述になっている。それは、北海道の季節感と全く違うわけです。

学校で教わった観念として身につけているものと自分の生活実感が違う。そういう違いを自然と受け入れながら育ってきたということなのです。これは北海道で生まれ育った人間の考え方や行動というものに影響しているに違いはないと日頃考えておりました。

良い素材にも薄化粧が必要

品川 北海道の魅力を引き出す取組みの一つに観光があります。東アジアを中心に北海道の国際観光は急速に拡大しています。

国土交通省では、外国からのお客さまを1000万人に到達させることを目標とする「ビジット・ジャパン・キャンペーン」に取り組んでいます。昨年の7月には日本、中国、韓国の観光担当大臣会合を北海道でスタートしました。大西さんのおられる阿寒で最初の会議を開催させていただき、観光交流と協力をさらに拡大するため、「北海道宣言」が出されました。

このあたりのテーマからこれからの北海道を考える上で課題をもう少し掘り下げていただけますでしょうか。
大西 北海道の観光は大量集客で発展してきました。定番、定形の中で、サービスなどもなるべく簡素化して効率を上げる。北海道の他の産業もこれに近いものがあつたのではないかと。それが今、成熟した観光になつてきたところからその対応に遅れてきたのではないのでしょうか。また、月並みですが、「食材の宝庫」ですが「食の宝庫」とはまたちよつと言えないレベルかなと。

ここは努力をしなければならなかなと思つています。
石田 そのお話は非常に示唆的だと思つたのです。北海道には資源は立派にあるし、北海道の人は熱いし、濃

いし、楽しいし、気持ちも若い。観光開発もそつたと思つていますが、精神的な「若者」、ものごとくに熱中できる「バカ者」、外からの目で見られる「よそ者」の三つがないとつまらないとよく言いますが、そういうものが北海道の人たちの気持ちの中にはあると思つたのです。資源も食も、景色もそつです。温泉もいっぱいありますし、自然もいっぱいあるし、先住民の歴史もいっぱいある。でも、まだ低調だとおっしゃつておられる。

今中 不便なことが結構素敵なことなのではないかなと思つたようになってきます。高速道路はすごく便利だと思つたのですが、自然の中に自分の身を置いて楽しむところの場合、手軽に行けるとそのありがたさ、貴重さがあまり自分の中に伝わってこないよつな気がして、便利になるのももちろん必要ですが、逆に今、便利になりすぎていく時代なので、逆に車でなければ入つていけないところや電車を乗り継いでいかなければいけないところもあることが新しいといつか、素敵に感じるところはあるのです。

小林 先ほど来、話題に出ました観光と食材。食材が豊富、あるいは資源が豊富なにつましく活かしきつていないという話。食と一つことに関連づけて考えてみますと、よく言われているのは、北海道は素材はいいのに手を加えれば加えるほどますますよくなる。だから、素材のまま食べるほうがおいしいのだと。しかし、一番付加価値が上がるのはもちろん手を加えたところですから、いいところ取りをされてしまつた。

大変昔ですが、食の問題をめぐつて北海道をテーマに



フリーアナウンサー
いまなか まき
今中 麻貴

藤女子短期大学卒業。札幌テレビ放送(STV)にアナウンサーとして入社し、「ズームイン!!朝!」の中継などを担当。その後フリーアナウンサーとなり、現在「ズームイン!!SUPER」のキャスターとして出演中。一児の母。

ではないかと思っております。

北海道はある意味で実験場

した座談会がありました。その座談会のメンバーの中に料理の先生がいらっしゃって、「北海道の料理は、いつその素材のままのほうがいいのではないか。美人は厚化粧をしてはいかんと言われている。」と言いましたら、その先生が「素材のままで済むのは15〜16歳までです。一刷毛、ほんのちよつとした薄化粧。それが大変重要で、北海道の料理もそこなのです。」と言われました。

ほんのちよつとしたお化粧。相当のセンスと能力がないとできません。そこをちゃんと勉強しないとイケないよ。

大西 今、小林先生があつしやられたこと、われわれもそのとおりだと思っております。素材そのもの、ありのままがいいのだというのを、僕は、素材そのものありのまま信仰」と言つのですが、要は逃げなのです。本当の食材を使った料理、そこをわれわれとことん目指したのかといつたら、首をかしげることが多いのです。

小林 余談ですが、薄化粧の話を講演で女子学生に聞かせたところ、感想文には「今日の話は就活メイクに活用させていただきます。」と書いてありました（笑）。北海道にも北海道弁と言われる方言はあります。どちらかという東北弁が一部影響しているのかもしれませんが、全国から人が集まってきたわけですから、言葉遣いはやや乱暴なのですが、比較的共通語、標準語に近いのです。

この間、ある人と話してしましたら、いろいろな企業がコールセンターをどこに置くかというときに、素外札幌を候補にするということでした。なぜかという、少し練習をすると大体標準語が話せる、癖があまり出ない、わりと容易に使い分けができるからだということでした。これは一つの例ですが、日常的な生活実感と観念として持っているものとの使い分けを自然と身につけているところがあるかも知れないなど。これからの北海道を考えると、これはいいヒント

品川 先人のためめ努力に支えられ、北海道は北欧の一国にも匹敵する規模の地域経済社会を形成するに至つていますが、一方、自治体の財政破綻、経済の低迷から抜け出せないことなどが現実の問題となつています。これからの北海道を考えるにあたり、その魅力をどう引き出し自立に結びつけていくか、北海道の抱える課題、弱点を克服するため、現在取り組んでおられること等を、お話しいただきたいと思ひます。

石田 団塊の世代がそろそろリタイアしますが、その方々のニーズがいっぱいあると思つたのです。そういうニーズをとらえきれないのではないかと。人々のいろいろな楽しみ方、家族とか、夫婦とか、あるいはカッパルで楽しみたいという思いにまだちゃんと応えていないと思つたのです。「シーニックバイウェイ」でもそのあたりを目指して、ぜひ皆さんの思いに沿つような手づくりの、カスタムメイドの観光ができるような仕掛けを考えましようと思つたのですが、まだ始まつたばかりで、まだまだ先は遠いのかなと思ひます。

北海道では観光が基幹産業の一つですから、新しい観光のあり方の提案、目的地での楽しみ方の提案をどうするか、それをどういふ形で発信していくかといふところが観光といふ面からは非常に重要ではないかなと思ひます。

今中 以前、中継で丸瀬布町に行つたのですが、町の80%くらいが森林で、森林鉄道の名残りの「雨宮21号」が展示されている。雨上がりの空気のきれいさとか、緑の匂いとか、ものすごく感動を受けたので、最近もう一度行つてみたいと思つてインターネットで調べたら、もう丸瀬布町はないのです。遠軽町と合併したのです。もう、すごいショックを受けて。ああ、私の中ではあそこは



鶴雅グループ
代表取締役社長
おおにし まさゆき
大西 雅之

1979年東京大学経済学部経営学科卒業。三井信託銀行を経て、1989年(株)阿寒グランドホテル社長就任。現在「あかん遊久の里・鶴雅」など、道東において多くのホテルを経営し、2003年国土交通省観光カリスマに任命。

っぱり丸瀬布町だ」といふ感じが強くて、そういう町がだんだん増えてくるのかなと非常に残念です。一つ一つの町や村がもつともつとわが町のブランド、これぞブランドというものを自分たちの手でつくり上げていく。そういう内側からの力が非常に必要なのではないかなと思ひました。



全国に有名になっている旭山動物園(ペンギん館)

旭山動物園は、本当に動物園ががんばってあそこまでのブランドにした。「そうか、そういうこともできるんだ」と非常に感銘を受けたので、できないことはないのではないかと思ひました。

石田 夕張市は財政破綻しましたが、若者たちががんばっていい成人式をしたとか、夕張映画祭を市民の手で再生させたり、閉鎖となつた市の施設を自分たちの誇りでもあるし、生活のために必要だからということでも、市民の皆さんがNPOをつくって自らの手で運営されていますね。それが全国ネットのコースで流れました。

夕張の破綻というのは暗いイメージでしたが、その後の皆さんのがんばりは、ものすごいプラスのイメージがあるのではないかと。苦しいのはわかっているけれども、結構頑張っておられるからという、そういう人の気持ちのあり方というのはすごい財産ですし、そういうことが全国に発信されたというのはすごいことだと思つているのです。

大西 民活とかいろいろな方法で立ち直ろうとしていますが、これは地方自治体が破綻したらこんななにもじめなんだぞという前例ではなくて、逆に、みんなやればこれだけよくなるんだぞという例をつくるべし。というのは、今、夕張を例にとつて、地方自治体が破綻したらこんななにもじめなんだぞというのを全国に知らしめなければいけないみたいな、そういう空気もあつたりするので、反対に、民活をやつたらこんなによくなるんだという例をつくるべく動けないかなと。悪い前例をつくらないというか。

石田 「どっこい地域は生きています」ということだと思つたのです。あれは本当に感激しました。

小林 前例というお話、確かにそのとおりだと思いません。だから、北海道は意味で実験場になり得るわけです。結局、北海道開発、これからどつするといつ話もそうなのだと思うのです。つまり、21世紀の日本の一番望ましい姿は何かといつことを言ったときに、そのモデルをどつどつするからといつたら、一番つくられるのが北海道だと考え得るのではないかと思つたのです。

石田 10数年来、北海道の交通計画とか基盤計画の勉強を一緒にさせていただいてまして、特に北海道の方がおっしゃるのが、北海道は広いですが、寒いですが、ですから大変なので何とかしてよ」と。当時は、そういう北海道特殊論でものことが語られていたのですが、最近ずいぶん変わってきて、今度の開発計画にそういう「ユアススはいじさいありません」。

日本全体のために北海道として何ができるか、「こういうことができます。そのための実験をするので、多少ともリスクがありますから、税金を使わせてよ」と。こつこつ論理だつたら喜んで協力します。僕自身もそうですが、北海道ファンは日本人だけではない。森地先生がアジアの宝とおっしゃったような、本当にすばらしいところですから、そういう気持ちでやっていけたらと思つたのです。「シーニックバイウェイ」というの



クルーズ船の入港を歓迎する人々(網走港)

は、そういう意味では一つの実験をしてうまくいったので全国に広がったということだと思つたのです。

小林 これからの北海道を考えると、非常に重要な戦略ポイントになることに、歴史の浅いことがあるのではないのでしょうか。特に西日本を旅行すると歴史の蓄積の深みとか多様性を感じ、北海道の歴史の浅さといつことはどうしてもいるいな面に出てくる。しかし、逆に言つと、歴史の浅いことが非常にメリットになるのだろつとは思つています。

札幌は超近代都市です。しかし、その行政区域内に熊が出てくる。熊が出るといつことは原始の自然なのです。超近代と原始が共存している。どうしてそういうことができるのかといつと近代化がものすごく短期間に行われたからです。もともとは採集狩猟経済のような社会にいきなり近代都市が生まれ、それが非常に近い所で共存している。これは大変なメリットだと思つたのです。他に例がないのですから。オーストラリアやカナダ、いわゆる新大陸に行けば多分それに似た現象はあるのでしょうが、北海道は世界に類例がないくらい際立つた特色を持っていると思つたのです。これをどつ活かしていくかといつのが、これからの北海道を考えると、非常に重要な戦略ポイントになるのではないかと私は思つております。

「安全・安心」を担える北海道

品川 皮肉なことに、人口減少が最初に始まるのは北海道です。高齢化もそうですが、これから日本が迎え



北海道武蔵女子短期大学学長
こばやし よしひろ
小林 好宏

1957年北海道大学経済学部卒業。1962年同大学院経済研究科博士課程修了。1965年北海道大学経済学部助教授、1977年同教授、1998年より北海道大学名誉教授。札幌大学経営学部教授を経て、2005年より現職。

る社会の先を歩いていかなければいけない宿命が北海道にはあります。日本の課題を考えることに繋がっていくことだろうと思います。その中で、北海道の特性として何を担っているのか。以前は石炭などのエネルギー基地だった北海道は、今や石化エネルギーで暖房をとっていますので、エネルギーという面からは一番弱いところでもあるのです。

そこをどう解決していくかを通じ、結果として日本をリードする先駆者たると思うのです。それが北海道イニシアティブにも繋がっていく。次期計画の中にも何ができるだろうかをどう盛り込むか考えさせていただいているところです。

小林 これまでの日本の社会、特に経済ということを象徴するキーワードというのは「発展」とか「成長」という言葉で表されていた。おそらく21世紀は「安全」とか「安定」とか「秩序」とか、そういった言葉が時代を表すキーワードであろう。大筋としてそうだと思います。

そのときに、いろいろな意味での安全、国防ももちろんありますが、いろいろな危機が起こるときの安全面を確保しておかなければいけない。北海道には間違いなくその役割が一つあるのです。

例えばオイルショックの後、石油備蓄基地というのを置きました。その備蓄コストはかかるのですが、それは安全のためのコストです。安全というのは普通、公共財であり、これは、本当は国民の税金で払うべきものです。だから、これは国がちゃんとお金を出さなくてはいけないというのには言っています。そういう安全を担う部分は北海道にはすくなくはいまあります。

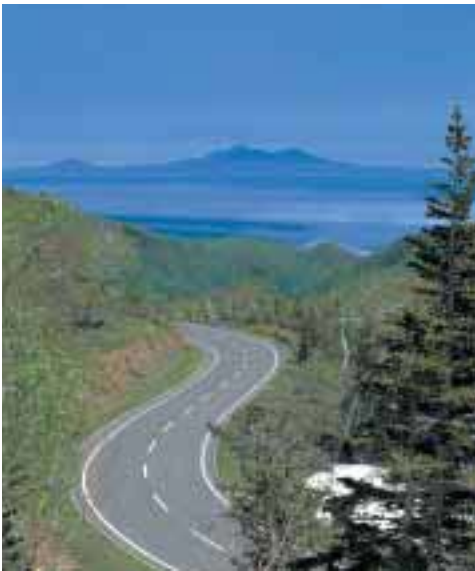
それから、将来の食糧危機に備えての農業用地。用地備蓄というのは難しいことなのですが、それが必要なんです。そのためのコストは北海道でも担うのは難しい。でも北海道がその安全を供給しなくてはいけません。

北海道の開発というのは国による開発として進められてきたというこの意味と裏腹になっていると思います。北海道が何を担うかといったときに、日本国にとって何が課題であるか。それに対して北海道が応えていくのだということを示す必要があるわけだし、今申し上げたような、これからの21世紀のキーワードになる「安全」とか「安心」とかという部分で一番それを担える立場にあるのだというこのことをはっきりと明示すべきだと思います。

石田 食糧とかエネルギーとか、本当にそのとおりだと思います。近未来には必ずそういう危機が起こると思うのですが、今、そういうこのコストを国民がなかなか理解しにくいという現状もあると思うのです。ですから、そのこの仕組をどうつくるかということがまさに問われています。

北海道は、幸か不幸か人口減少や高齢化などといったところで日本のトップランナーにならざるを得ないところがあります。ですから、そのために何をすべきか。そのこのところの理屈と効果をはつきりして、やっぱり必要なものは必要だという主張を正々堂々としていくことが必要だろうと思います。

大西 北海道が何をできるか。食糧の生産・自給問題



知床峠から望む国後島(羅臼町)



北海道局長
しながわ まもる
品川 守

北海道大学大学院工学研究科(土木工学専攻)修了後、1976年北海道開発庁入庁。国土交通省北海道局水政課長、北海道開発局石狩川開発建設部長、北海道開発局建設部長などを経て、2006年7月より現職。

にしてもロシアとの関係にしても北海道は大きな役割を担うと思っていますが、そういうことをきちっともつと言わなければだめだと思つのです。そうしないと、都会の方は「お荷物北海道」みたいに思ってしまうので。もつと北海道の可能性とか、今担っている、それから将来担うであろうことをアピールしていかなければだめだと思っています。

今中 今、外国の方がたくさん北海道を訪れ、オーストラリアからもスキー客が訪れていますね。もちろん外国の方にも来ていただきたいのですが、日本の中にもリピーターはいますが、行ったことのない人がまだまだいます。私の周りにも「一回も行ったことがない」と言っている人がかなりいて、さつぱろ雪まつりの雪像の大きさなどを説明すると、皆さん驚くのです。まだまだ北海道のすばらしさを知らない人が多いと思つので、ぜひこの先も増えてほしいと思つのです。それには子どものうちから北海道に親しんでおくというのはいかなと思つのです。

石田 着実に成果が出つつあるというのには、連携型、協働型のまちづくりとか地域づくり、あるいは観光への新しい形への展開。これらはいろいろとあって、いろいろな人が頑張っておられる。「この効果をさらに着実なものにするために、本当に暮らしが良くなったな、まちが良くなったな」ということが目に見える形で分らないと、そのエネルギーだつて続かないし、楽しくない。そのためすべきことはいまありますと思つのです。

実は、そういうことは日本の各地で、いろんなところで苦しんでいる、困っていることです。地域の人の主導でそういうことができるのは、「やる気」だけではだめで、「できる気」がないとやっても楽しくならない。そういうのは日本の他の地域と比べたら北海道では育ちつつあると思うのです。

行ってみたい・住んでみたい北海道に

今中 「食育」という言葉が流行っていますけれども子どもの頃から本当に学ぶことって非常に大事なことでと思います。北海道は漁業も農業も林業も盛んです。それにダイナミックな本物がある。それを、例えば夏休み期間に農業のお手伝いをしに行くとか。

石田先生も先ほど、北海道への旅行で人生が変わったとおっしゃっていましたが、そういうことを子どもの中に経験すると大人になってからも北海道が身近で「あの土地にまた行ってみたい」という気持ちが起こるような気がするのです。それが将来的に観光にも結びついていくのではないかなという気がします。

石田 今、ずいぶん規制が緩和されて農家民泊もできますから。少人数ですから、民泊を終えた別荘などは、それは本当に「涙」、「涙」で。

今中 そうでしょうね。

石田 そういう体験をすると絶対大好きになります。よさが本当にわかるというか。風景も、あるいは食べ物も温泉もそうかもしれませんが、親切にされたとか感動を共有できたとかいうことは非常に大きいと思うのです。そういう意味では、北海道の人たちは、そういう心に本当に満ちあふれている。北海道育ちではない人間からすると、そういう印象がとても強い。ですから、それは本当に大事なことだと思っています。

大西 北海道の人間は、ちょっと木訥で、表現が下手

なのですけれども（笑）。

この間イギリスに行ったのですが私有地を自由に歩けるフットパスが30万キロメートル国内にあるといつのです。僕たちはこういう国もあるということを知らなければならぬと思うのです。そして、そこを歩いてきたのですが、村々に「コンビニ」エンスストアがない。イギリスでは村々につくらせないのだそうです。小さな商店がみんななくなっていく、コンビニだけになってしまう。そして、村のコミュニティが壊れていくのです。

僕はコンビニが悪いとは申しませんが、利便さよりはコミュニティを守っていくということを進められているらしいです。

北海道はやはりそういう場所なのではないかと思えます。どんどん人口が減る中で難しいと思つていますが、逆にそれができる地域だと思つています。

小林 世界中に物やお金動き回っている。居ながらにして世界中の物が手に入れられるわけです。

しかし、そういう中で動けないものがある。その土地固有の風景であるとか気候・風土。それは人間の側が移動していかなければ手に入らない。今日の時代において、その旅行の意味はすごく大きい。そういうところまで掘り下げて考えてみると、やっぱり観光、ツーリズムが21世紀の現代社会においては大変大きな意味を持っているということが言えると思つ。それがまず一つ。

もう一つは、特に北海道に関連させて言つときに人口減少はもう不可避だろうと。そういう中でも、日本国の中で非常に重要な部分ですから、人が定着して住んでいなくてはいけない。しかも、満足して住める状況になくはないといけない。そのときに、拠点であるところの札幌とのアクセスはやはり必要だと思います。今は流行らなくなったのですけれども、どうしたって交通アクセスは必要なのです。



広大な畑作地帯（十勝地方）

「道路はもういいよ」と言われていても、やはりそこと結びつけて考える必要があるわけです。切り離してしまうと、なんだ、建設関係ばかり、観光はさっぱりという話になる。実は、そういうことではなくて、観光産業を内容豊富に活かすためには、やっぱりインフラが必要だということです。

品川 これからの我が国を考えますと、地球規模のダイナミックな競争、生存基盤そのものを脅かす地球環境問題、かつて経験したことのない規模の人口減少や急速に進行する少子高齢化など、大きな環境変化に直面しており、こうした環境変化に適切に対応していくことが課題となっております。今日のお話で北海道がその固有の資源と地域特性、培われた技術、社会基盤等を最大限活用して、我が国の課題解決に貢献できると勇気づけられました。本日はありがとうございました。